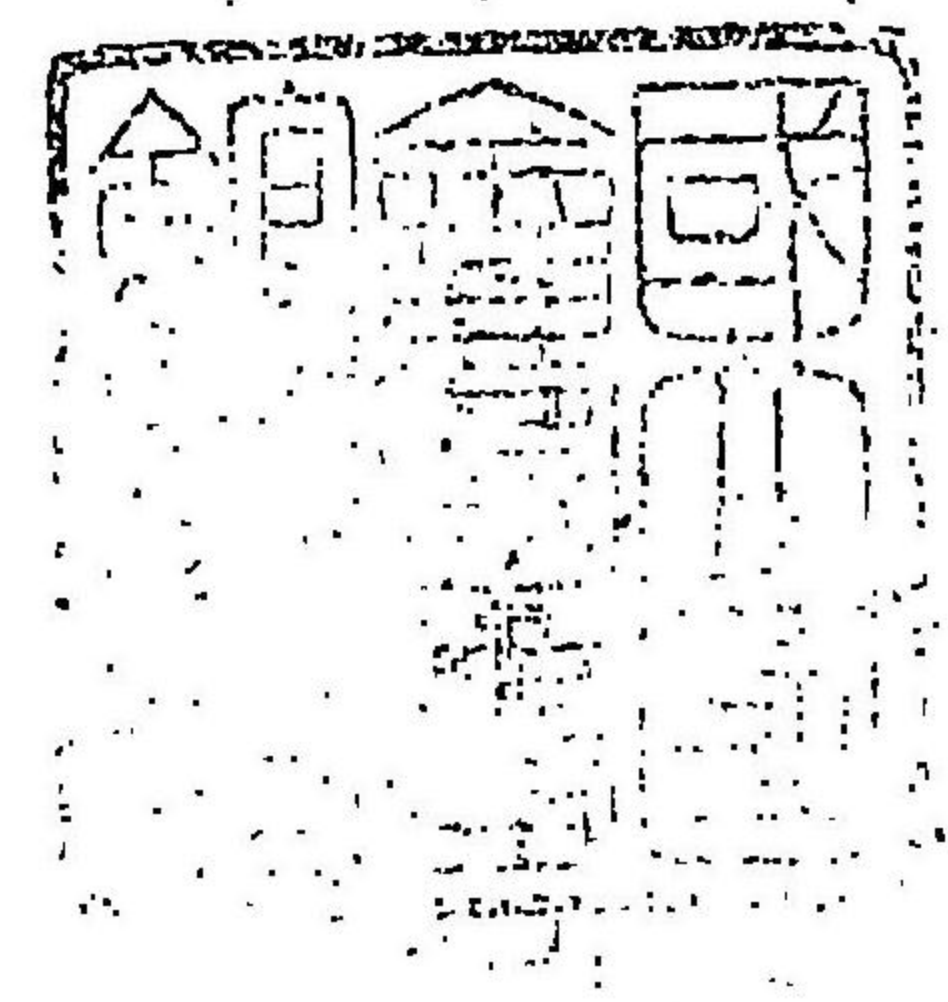


大日本憲法

三  
二  
七  
九

323.3  
D172



D 5539

原 規

第一條 日本帝國ハ萬世分割スベカラザル世襲君主國トス  
帝位ハ皇室家憲ノ規定ニ從ヒ皇室ニ於テ之ヲ世襲ス

第一章 天皇

第二條 天皇ハ神聖ニシテ侵スベカラザル帝國ノ主權者ナリ

第三條 天皇ハ一切ノ國權ヲ總攬シ此憲法ニ於テ欽定シタル規定ニ從ヒ之ヲ施行ス

第四條 天皇ノ凡テノ政務ニシテ其効力ヲ有スルニハ少クモ一大臣ノ對署ヲ要ス天皇ノ大臣ハ責任ヲ有ス

第五條 立法權ハ國會ノ承諾ヲ以テ天皇之ヲ施行ス

第六條 天皇ハ法律ヲ裁可シ其發布及執行ヲ命ズ

第七條 一般危急ノ場合ニ於テ及公共ノ危難ヲ避クル爲メ天皇ハ内閣ノ責任ヲ以テ法律ノ効力ヲ有スル勅令ヲ發スルコトヲ得此勅令ハ承認ヲ得ル爲メ次會ノ國會ニ之ヲ提出スベシ

第八條 天皇ハ特典ヲ附與シ各場合ニ於テ法律ヨリ特免スルノ權ヲ有ス但憲法及既得權ニ抵觸スベカラズ

第九條 天皇ハ貴族ニ叙シ勳章及其他公ケノ徽章ヲ賜フ

第十條 天皇ハ陸海軍ノ最高命令ヲナシ平時戰時ニ於ケル兵員ヲ定メ及兵ニ關スル凡テノ指揮命令ヲナス

第十一條 天皇ハ宣戰講和ノ權ヲ有シ戰權ヲ施行スル爲メ必要ナル勅令ヲ發ス

第十二條 天皇ハ外國ニ對シテ帝國ヲ代表シ外國政府トノ條約ヲ締結ス此條約ハ正當ノ公

布ニ依リ臣民ニ對シ効力ヲ有ス

第十二條 天皇ハ國會ヲ召集シ及之ヲ開閉延長ス又之ヲ延期或ハ解散スルヲ得

第十三條 天皇ハ其權ノ施行ヲ他人ニ委任スルヲ得

第十四條 攝政ハ職ヲ置ク場合ハ帝室家憲ヲ以テ之ヲ定ム攝政ハ天皇ノ權ヲ其名ヲ以テ施行ス

攝政職ヲ置クノ間ハ憲法及帝室家憲ヲ變更スルヲ得ズ

第十五條 國庫ヨリ天皇及皇族ニ支辨スベキ收入ハ帝室家憲ヲ以テ之ヲ確定ス此收入ハ會計豫算ニ掲載セズ

第十六條 天皇ハ帝室男統ノ權利ニ關スルモノニ限リ其承諾ヲ以テ帝室家憲ヲ發シ一般ニ周知遵奉セシムル爲之ヲ最上官廳ニ下付ス

帝室家憲ハ國會ノ承諾ヲ受クルヲ要セズ但シ此レニ依テ憲法ノ規定ヲ變更スルヲ得ズ

第二章 國會

第十七條 國會ハ元老院及代議士院ヲ以テ成ル

第十八條 元老院ハ左ノ成分ヲ以テ組織ス

- 一 丁年皇族
- 二 帝國ノ公侯伯但世襲トス
- 三 同族中ヨリ撰舉セラレタル子三十名男十名
- 四 功勞門地財産ニ依テ世襲或ハ終身ニ救撰セラレタル者
- 五 各府縣ニ於テ最多額ノ稅ヲ納ムル土地所有者及工業者二十五名中ヨリ撰

舉セラレタルモノ各一名

第四、五ニ掲ケタル者ノ員數ハ第二、第三ニ掲ケタル人員ヲ超ユベカラズ元老院議員ノ撰舉ハ總テ終身ノ任期ヲ以テス撰舉規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十九條 元老院議員ニ列スルハ勅書ノ命令ニ由ル議員ニ列シ及任命撰舉スルノ要件ハ丁年及代議士院撰舉規則第何條ニ掲ケタル不能力ノ理由全ク之レナキモノトス

第二十條 元老院ノ議長ハ議員中ヨリ天皇之ヲ命フ

第二十一條 代議士院ノ議員ハ三年毎ニ撰舉規則ニ從ヒ直接法ヲ以テ人民之ヲ選舉ス

一般ノ新選舉ハ各選舉期限ノ經過シタル時及代議士院解散ノ場合ニ於テ之ヲナシ特別ノ選舉ハ死去退職俸給アル官職ニ就クヲ及其他ノ理由ニ依リ議員ニ欠員アル時之ヲナス此等ノ場合ニ於テ前議員ハ再選セララル、コヲ得代議員解散ノ場合ニ於テハ元老院ハ同時ニ延期ス

第二十二條 選舉人名簿ニ記載シタル獨立不羈ノ日本人ニシテ二十五歳ニ滿リ政府ニ直稅ヲ納ム選舉法ニ掲ケタル不能力ノ理由全ク有セサル者ハ皆撰舉權及被選舉權ヲ有ス

獨立トハ自己ノ財産ヲ自由ニ處理スル權ヲ有スルヲ云フ不羈トハ自己ノ費用ヲ以テ其活計ヲ立テ一私人上ノ勞役若シハ傭役ノ關係ヲ有セス又ハ公然自己ノ役務ヲ公衆ニ供給セサルヲ謂フ

第二十三條 撰舉區及其區内ノ投票區ハ帝國ノ行政區畫ニ依リ法律ヲ以テ之ヲ設ク

一 撰舉區内多數ノ投票區ニ於テ投票ノ多數ヲ得タルモノヲ以テ當選人トス  
凡テ撰舉人名簿ノ確定及撰舉ノ結果ニ關スル故障ハ裁判所ノ判決ヲ以テ之ヲ裁決ス

第廿四條 公ケノ官廳、撰舉委員、協會、組合、又ハ其名ヲ以テ公然ノ集會新聞紙ニ於テ又ハ印刷物ノ公布若クハ貼附又ハ其他ノ廣告法ヲ以テ候補人ヲ舉示シ一定ノ人物ノ撰舉ヲ勸告スルコトヲ禁ス

第廿五條 撰舉區ニ於テ撰舉セラレシモノヲ望ム者ハ撰舉期日前四週間撰舉ノ爲公然ノ集會ヲ催シ新聞紙ニ廣告シ及其名ヲ以テ印刷物ヲ公布スルノ權ヲ有ス其集會ヲ豫メ届出ヘキコト及其警察上ノ監視並ニ印刷物ヲ官廳ニ納ムヘキコトニ關スル法律上ノ規定ハ此レニ依テ變更スルコトナシ

第廿六條 何人ダリトモ同時ニ元老院兼代議士員ノ議員タルコトヲ得ス

第廿七條 代議士院ハ會議毎ニ其議長及副議長ヲ撰舉ス

第廿八條 代議士院議員ハ首府ニ往復旅費及召集ノ前日ト閉會ノ翌日トヲ合シ會期滯在中一日五圓ノ日當ヲ受ク

第廿九條 兩院ノ議員ハ院內議事ニ關スル發言及投票ニ就キ裁判所ニ於ケル責ヲ負ハス兩院ノ議員ハ會期中罰セラルヘキ行爲ノ爲拘留又ハ審問ヲ受クルコトナシ但犯罪現行ノ場合又ハ犯罪ノ後直チニ捕縛セラレタル時又ハ議員ノ承諾ヲ得タル限ハ此限りニアラス

第三十條 國會ハ毎年一回通例十一月一日ニ其他必要アル毎ニ勅令ヲ以テ之ヲ召集ス國會議員ハ各々內務大臣ノ書面ヲ以テ召集セラレモノトス

第卅一條 會期ハ通例三月ヲ超過セス但天皇ハ何時ニテモ之ヲ延長スルコトヲ得 代議士院ヲ解散シタル日ハ三月内ニ其新撰舉ヲナシ其後三月内ニ國會ヲ召集スヘ

第卅二條 國會ハ何レモ召集セラレ又ハ開會セラル、前又ハ開會延期若クハ解散セラレタル後ニ於テ集會スルコトヲ得ス 國會ハ何レモ國會ノ議決ヲ要スル事件ニ關シ各別ニ有効ノ決議ヲナスコトヲ得ス

第卅三條 兩院ハ過半数ノ多數ヲ以テ議決ス決議ニシテ其効力ヲ有スルニハ各院ニ於テ少クモ百名ノ在席ヲ要ス兩院ノ議員ハ皆他人ヲシテ議院ニ於ケル代理ヲナサシムルコトヲ得ス

第卅四條 天皇ノ大臣ハ議員タラサルトモ雖モ各院ニ出席シ議事中ニ加リ及何時ニテモ演説ヲナスノ權ヲ有ス又主任官ヲ各院ニ派出セシムルコトヲ得主任官ハ大臣ト同一ノ權ヲ有ス

第卅五條 各院ノ會議ハ之ヲ公行ス但政府ノ建議又ハ其院ノ決議ニ依リ公行ヲ止ムルコトヲ得

第卅六條 國會ノ執務方法ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム各院ハ此法律ニ循ヒ事務細則ヲ議決ス

第三章 國會ノ權利 第卅七條 國會ハ憲法ニ於テ明ニ與ヘラレタル權利ヲ有ス

第卅八條 國會ノ權限ニ屬スル事件ハ各院ニ於テ各別ニ之ヲ議ス何レノ院ニ先ヅ議案ヲ提出セシト欲スルヤハ政府ノ意ニ隨フ但財政ニ關スル議案ハ此レト異ニシテ先ヅ代議士院ニ提出ス

第卅九條 各院ハ政府又ハ他院ヨリ提出シタル議案ヲ議シ及決スルノ義務アリ政府ノ議案ハ其求メニ依リテハ毎ニ之ヲ先ニスベシ

第四十條 國會ハ政府ノ提出スル法律案ヲ議決ス各院ハ法律案ノ提出セラレシコトヲ建議シ

又ハ自ラ法律案ヲ提出スルノ權ヲ有ス但憲法ニ關スル法律案ハ政府之ヲ提出スルコトヲ得

第四十一條 各院ノ議員ハ十五名ノ同意者アルトキハ其院ニ於テ法律ノ發布ヲ建議シ又法律案ヲ提出スルコトヲ得議院ハ其建議及議案ヲ議スベキヤ否ヤヲ議決ス政府ノ法律案及其他ノ議案ヲ議スルノ際各議員ハ建議ヲ爲スノ權アリ

第四十二條 國會ハ凡テノ國事殊ニ司法及行政部内ノ欲失ニ關シ書面ヲ以テ請願願或ハ建白ヲ天皇ニオスノ權アリ

此書面ハ政府ヲ經由シテ天皇ニ提出スルモノトス但大皇他ノ接受ノ手續ヲ命ジタルトキハ此限ニアラズ

第四十三條 行政ノ通常手續ヲ以テ伸理ヲ得ザリシヲ以テ一私人及團體ヨリ其事件ニ付建議書及請願書ヲ進ムルトキ各院ハ此書面ヲ不當ナリトシ或ハ理由トシテ却下シ又通知若クハ參酌ノ爲之ヲ政府ニ送致スルコトヲ得

第四十四條 各院ノ議員ハ各前二條ニ掲ケタル事件ニ關シ其院ニ建議ヲナスノ權ヲ有ス但此建議ヲ討論スルヤ否ヤハ其院ノ決議ニ任ズ

第四十五條 各院ノ議員ハ各政府ニ質問ヲナスノ權ヲ有ス但少クモ三日前ニ本院ヨリ簡單ナル理由書ヲ以テ之ヲ政府ニ通知シタル後ニ限ル政府ハ其質問ニ返答スルヲ至當ト見認ムルトキハ即時ニ又ハ相當ノ時日内ニ其返答ヲナス

議院ハ其質問ノ事件ヲ討論セシムルコトヲ議決スルコトヲ得

第四十六條 政府一切ノ議案議院凡テノ建議及接受シタル請願願ハ準備又ハ一定ノ建議ヲナサザルモ爲メニ各院ニ於テ之ヲ委員ニ負托スベシ

大臣及政府主任官ハ委員會ニ於テ各院ノ會議ニ於ケルト同一ノ權利ヲ有ス

第四十七條 凡テ本院ヨリ他ノ議院又ハ委員ニ提出シタル議案ハ同時ニ之ヲ政府ニ送致ス

第四十八條 各院及其委員ハ自己ノ權限ニ屬スル事件ニ關シ必要ト認ムル説明及調査ヲ内閣又ハ主務省ニ請求スルノ權ヲ有ス内閣又ハ主務省ハ其請求ニ應ズルノ義務ヲ有ス

國會各院又ハ委員ハ官廳又ハ一個人及一團體ト直接ニ交通スルコトヲ許サス

第四十九條 天皇ハ國會又ハ各院ノ決議及建議ニ關シ即時ニ又ハ各會ノ終リニ於テ閉會ハ勅語ヲ以テ其裁決ヲ了ラ

### 第四章 權利義務

第五十條 國民ニシテ資格ノ得喪ニ關スル原則ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

政府ハ此規定ニ從ヒ外國人ニ歸化証ヲ下附ス大歸化証ヲ十五年間日本國ニ滞在シタル者又ハ國家ニ對シ拔群ノ功勞アリタルモノニアラザレバ之ヲ下附スルコトヲ許サズ大歸化ニ依ルニアラザレバ國會議員大臣又ハ行政各部ノ長官陸海軍隊ノ指

令官ニ任命セラレ及撰舉セラルノ資格ヲ得ス

第五十一條 何人タリトモ法律ノ制限内ニ於テ自由ニ移住スルノ權ヲ有ス

第五十二條 何人タリトモ政府ノ平等ナル防護法律ニ對スル平等及凡テ公務ニ從事シ得ルノ平等權ヲ享有ス

第五十三條 身体住居及凡テノ權利ノ安全ハ之ヲ保証ス

第五十四條 所有權ハ侵スベカラズ地所買上ノ許否及要件ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十五條 何人タリトモ營業及職業ニ自由ニ撰就スルノ權ヲ有ス但法律ニ抵觸シ公ケノ秩

〇七

第五十六條 信教ノ自由ハ之ヲ保証ス但此レニ由テ公ケノ秩序又ハ公共ノ安寧ヲ妨害シ又ハ

第五十七條 思想ヲ吐露集會結社ノ自由ハ法律内ニ於テ存立ス

第五十八條 信書ノ秘密ハ侵スベカラズ公共ノ利害ノ爲必要ナル例外ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五十九條 兵役及納税ノ義務ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十條 軍紀ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム第五十一條乃至第五十九條ノ規定軍事上ノ法律及勅令ニ抵觸セサルモノニ非ラザレハ之ヲ軍人軍屬ニ適用セス

第六十一條 本章ノ規定ハ天皇ニ屬スル特權ノ施行ヲ變更セス

第五章 司法

第六十二條 裁判ハ裁判官ノ職掌ヲ施行スルニ於テ一モ政府ノ干渉ヲ受ケサル不羈ノ裁判所天皇ノ名ヲ以テ之ヲ行フ

第六十三條 民事刑事裁判所ノ構成ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十四條 裁判官ハ天皇ヨリ又ハ天皇ノ名ヲ以テ終身ノ任期ヲ以テ命セラル何人タリトモ將來ニ規定スヘキ資格ヲ有セサルモノハ裁判官ニ任命セラルコトヲ許サス裁

判官ノ懲戒ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十五條 何人ニ對シテモ裁判所ノ保護ヲ拒絕スルモノヲ許サス何人タリトモ法律上ノ裁判官ヨリ阻隔セラルコトヲ許サス非常ノ場合ニ於テ許サスモ特別ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第六十六條 政府及町村ハ民法上ノ凡テノ事件ニ關シ裁判所ニ於テ其權利ヲ辯護ス天皇ニ對スル訴訟ハ帝室經費ノ管理局ニ對シテ之ヲナスベシ

第六十七條 天皇ハ刑事ニ於テ赦免權ヲ有ス

第六十八條 判決ヲナス裁判所ノ審問ハ之ヲ公行ス

第六十九條 但公ノ秩序及風教ヲ亂ル者ハ法律又ハ裁判所ノ決議ヲ以テ其公行ヲ止ムルヲ得凡テノ裁判所ハ其判決及裁決ニ理由ヲ付スルノ義務アリ

第六章 行政

第七十條 裁判所ハ其權限内ニ於テ權限ノ有無ヲ裁決ス

第七十一條 天皇ハ大臣ヲ任免ス公務ニ於ケル凡テノ地位ハ天皇又ハ其命ニ依リ之ヲ授ク但法律ニ特別ノ規定アルモノハ此限リニアラズ

第七十二條 天皇ハ内閣ノ首席ニ臨ミ其議事ヲ裁決ス

第七十三條 天皇ハ一切ノ行政機關ヲ構成シ其進行スベキ原則及設置スベキ制度ヲ定ム

第七十四條 天皇ハ其命令處分ヲ實行スル爲刑罰及強制方法ヲ宣告シ及施行スルノ權ヲ有

第七十五條 天皇ハ國家ノ安寧公共ノ秩序安全ヲ維持スル爲必要ナル命令ヲ發ス

第七十六條 天皇ハ嚴戒ヲ宣告スルノ權ヲ有ス其結果ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

備シタル參與ヲ以テ官廳之ヲ治ム

第七十七條 町村ノ行政ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム町村ハ國體ノ權ヲ有シ政府ノ監督ヲ受ケ選  
舉セラレタル機關ヲ以テ自己ノ財産及事件ヲ治ム

第七十八條 行政廳ノ違法ノ裁決及處分ニ對スル權利ノ防護ハ行政裁判院ニ出訴スルノ權  
ヲ與フルニ依テ之ヲ安全ニス此裁判院ニ於ケル裁判手續ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第七十九條 職務上ノ義務ヲ破リタルヨリ生ジタル財産上ノ損害ニ關スル官吏ノ民法上責  
任ハ行政上ノ手續ヲ以テ其義務背反タルコトヲ確シタル後裁判所ニ於テ之ヲ糾治ス  
ルコトヲ得

第八十條 行政廳ト通常裁判所ト又通常裁判所ト行政裁判所トノ權限爭議ハ最上裁判院及  
行政裁判院ノ裁判官各半數ヲ以テ組織シ行政裁判院長ヲ以テ裁判長トナス所ノ裁  
判院之ヲ裁決ス

第七章 財政

第八十一條 第十五條ニ掲ゲタルモノヲ除ク外政府ノ一切ノ收入支出ハ毎年之ヲ豫算シテ  
會計豫算表ニ記載ス會計豫算表ハ政府之ヲ提出シ國會ノ承諾ヲ以テ確定ス

此承諾ハ現行ノ法律又ハ其他ノ權利名義ニ基ヅク收入ノ徵收ニ及ボサザ又ハ現行  
ノ法律又ハ其他ノ法律上義務ニ基ク支出ノ支辨及此支出ニ充ツル爲必要ナル金額  
ニ及ボサザルモノトス

故ニ國會ノ檢査ハ豫算額ノ法律ニ適スルヤ否ヤ及多寡並支出ヲ支辨スル爲提出シ  
タル金額ノ便否外ニ及ボサズ  
豫算確定ニ關シ協議整ハザルトキハ内閣ノ責任ヲ以テ天皇之ヲ裁決ス

第八十二條 一切ノ國家行政ハ第八十二條ニ從ヒ確定シタル會計豫算表ニ基ヅキテ之ヲ行  
フ外部ノ事情ニ依リ正當ノ期限内ニ國會ヲ召集スルコト能ハズ又ハ會計豫算表ヲ確  
定スルコト能ハザルモハ一時現行ノ會計豫算表ニ由ル但第八十八條ノ規定ハ格外ナ  
リトス

第八十三條 支出ヲ節減シ或ハ收入ヲ増加スルニ依テ剩餘ヲ生ズル時ハ政府ハ之ヲ以テ豫  
定外ノ必要ナル支出ノ支辨ニ充ツルコトヲ得其他豫算ノ超過ハ第八十二條ノ規定ニ  
從ヒ後日國會ノ檢査ヲ受クベシ

第八十四條 豫算外急切ナル需用ニ充ツルニ必要ナル臨時費用ヲ政府ニ備フル爲會計豫算  
表ニ掲グル毎年ノ補充額ヲ以テ貯蓄金トナスベシ  
貯蓄金ノ處分ハ本章規則ニ從ヒ政府之ヲ行フ

第八十五條 一切ノ國債ハ國會之ヲ保証ス國會各院ハ其議員中ヨリ主任者一名選任ス主任  
者國債ノ管理ヲ詳知シ法律ノ遵守ヲ監督スベシ

第八十六條 政府財産ノ各部ハ管理上ノ目的ヨリ出ルモノヲ除ク外國會ノ承諾ヲ經ルニ非  
ラザレバ之ヲ賣却讓與スルコトヲ得ス

第八十七條 新稅ヲ徵集シ國債ヲ起スニハ如何ナル場合ニ於テモ國會ノ承諾ヲ要ス  
但此承諾ハ他ノ方法ヲ以テ憲法上ノ支出ヲ支辨スルニ必要ナル金額ヲ徵集スルコ  
ト能ハザルトキハ之ヲ拒ムコトヲ得ズ

臨時ノ急切ナル需用アル場合ニ於テ國會未ダ集會セズ且ツ外部ノ狀況ニ依テ速ニ  
之ヲ召集スルコト能ハザルトキ又ハ國會ニシテ憲法ニ背反シテ決議ヲナシタルトキ  
ハ天皇ハ内閣ノ責任ヲ以テ必要ナル財産上ノ處分ヲナシ時宜ニ依リテハ新稅ヲ徵

集シ若クハ國債ヲ起スヲ得其處分ハ可成速ニ之ヲ國會ニ提出シ其徵集シタル金額ノ支出ヲ證明スベシ

第八十八條 會計豫算表ニ關スル計算ハ帝國會計檢査院之ヲ檢査確定ス

國會ノ通常會ニ於テ會計豫算表ノ總計算及國債ノ現狀ニ會計檢査院ノ一般ノ證明書ヲ併セ政府ノ義務ヲ免レシムル爲之ヲ國會ニ提出ス

第八十九條 帝室家憲ノ規定ニ從フ所ノ帝室財産ハ其現狀ヲ變更スルコトナク之ヲ維持シ國庫ノ負擔ヲ除ク爲可成之ヲ增加スベシ國會ハ帝室財産ノ管理ニ干涉スルノ權ナシ  
天皇ハ其所屬私有財産ヲ自由ニ處分スルコトヲ得其處分ヲ成サザルキト崩去ノ際其財産ハ帝室財産ニ歸ス

第八章 通則

第九十條 政府ノ一切ノ法律案及其他ノ議案ハ天皇ノ允許ヲ得テ之ヲ國會ニ提出ス

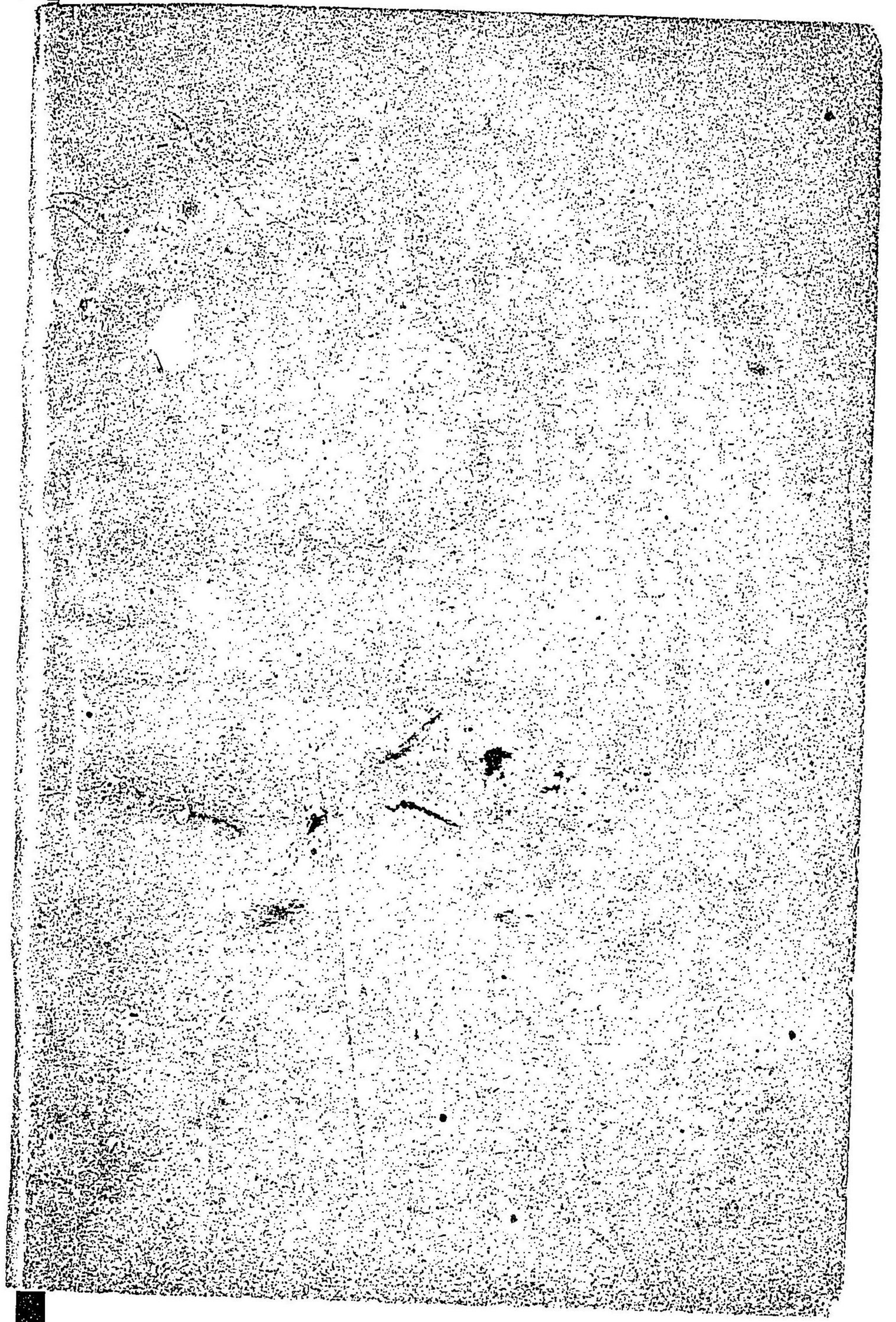
第九十一條 國會及凡テノ裁判所官廳ハ誠實ニ憲法ヲ遵守スルノ義務アリ國會ノ憲法ニ背ルハ其決議ハ無効ニシテ如何ナル關係ニ於テモ之ヲ守ルヲ要セズ

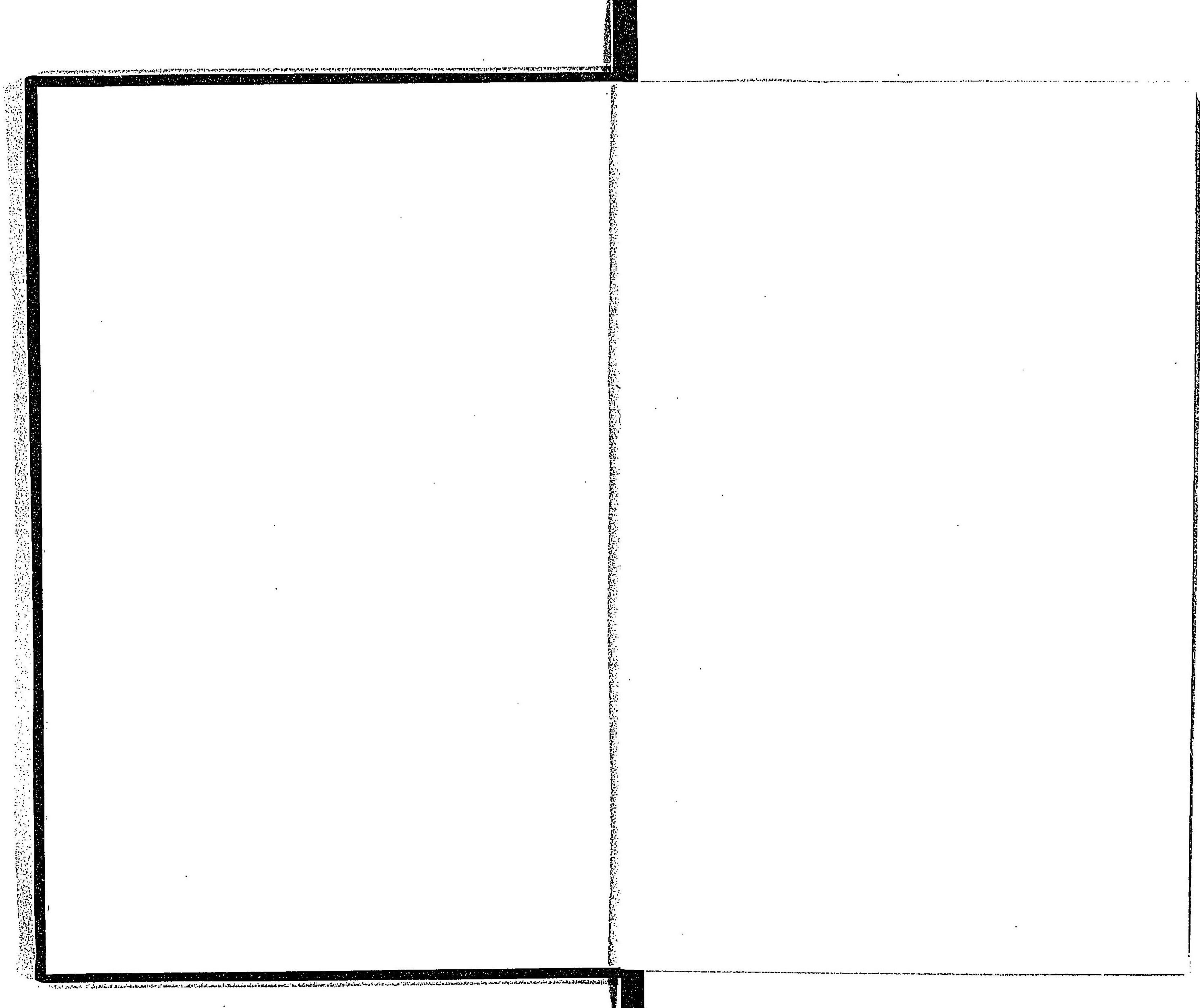
第九十二條 憲法ハ立法ノ手續ニ依ルニ非ザレバ之ヲ變更スルコトヲ得ズ

第九十三條 法律勅令ハ正當ノ手續ヲ以テ發布スルニ非ザレバ効力ヲ有セズ  
正當ノ手續ヲ以テ發布シタル法律勅令ノ法律上効力アルヤ否ヤノ檢査ハ裁判所及官署ニ於テ之ヲナスノ權ナシ

第九十四條 憲法施行ノ際現今ノ一切ノ法律勅令ハ憲法上ノ手續ヲ以テ之ヲ變更スルマデ効力ヲ有ス但憲法上ノ規定ニ從ヒ遲滯ナク之ヲ改正スベシ其憲法ニ抵觸スルコトノ判然タル場合ニ於テハ憲法ニ從フベシ







3.3  
72

031607-000-2

323.3-D172

大日本憲法草案

[出版事項不明]

BBE-0234



